
マジシャンズ・ブレイド

志貴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マジシャンズ・ブレイド

【Nコード】

N7262C

【作者名】

志貴

【あらすじ】

時には森羅万象をも操ることができると言われる神秘。異能ともいえる力を駆使し、異形の怪物や時には人を相手に戦う、男より漢な捺揮と非常識なひねくれ者の驚真のバトルストーリー。

剣と術が交じる時1

「ガウオツ！」

それは咆哮を上げ、大気を揺るがし。オレの鼓膜を痛いほど震わす。その後にかかる静寂と共に訪れる暴炎。

おそらくは人など一瞬で灰にするだろう。

クイエ・ルオン
「風律欠界！」

右手に構えていた魔刀ギルムを前方に構える。その先端から大気が振動し、そこを中心として風が二分に分かれていく。二分した空気の道に誘導されるように、およそ1千 を超える青白い炎が俺の約一・五メートル先で二手に切断されていく。

掠りもしない炎はオレにジリジリと熱を与えてくる。

熱さによる脂汗が出てきたところで炎の威力が弱まってきたし。

オレはここに機会を見つけ、風の盾を継続して発動させたまま、魔刀ギルムに魔力を通し、詠唱と同時に魔力を編み、魔術を構成させていく。

「ザ ジュ・レ#bディユツ………」

古来より伝えられてきた魔術の詠唱は、今はどの国の言語にも当てはまらない。一般人が聞いても意味が分からないし、意味が無い。魔術師が魔術のためだけに創りだした言葉だ。その言葉自体には全くの意味は無い。魔力を用いて魔術を発動させる過程での、いわば自己催眠のようなものだ。

その魔術の原理と構成過程を完璧にマスターしたら、詠唱は必要なくなるのだ。

アール・バグル
「爆砲利空・滅っ！」

空気が風により霧散する事による一瞬の静寂。その一瞬後に起きる爆音と爆風で体が持っていかれそうになる、がなんとか足を踏ん張り、堪える。

前方。

そこには、抉れた地面と、そいつの四肢っぽい残骸が黒焦げになって転がっていた。

仕事を終えた安楽感と魔力の消費で、立ちくらみの様なものを覚えるが、頭を振り、四方を確認する。

全くの気配なし。それがオレの戦闘終了の証拠となった。

「火石竜子^{サラムンダー}は楽だな。いつもこれだけなら疲れないんだけど」

嘆息と同時に出る欠伸を噛みこらして体を伸ばす。

「毎日ザコの相手などしていたら腕が鈍るところか、退屈すぎて死んでしまうな」

隣から雑音。お前はこのクソくだらない掃除に何を求めとんだ。この戦闘^{なつき}狂が。

「それと捺^{なつき}揮、術の名前を叫びながら発動させるのは、今時どうかと思うぞ。お前がそういう方向性のアニメに嵌っているというのなら、あえて俺は何も言わないが」

「驚真^{おつま}こそオレに教えてくれ。お前はときどき単細胞か痴呆症なのか微妙だから、お前の主治医が安楽死の方法に困ってるそうだぞ。

お前はどの死に方が好みだ？今ならオレが無料で行ってやる」

いつも通りの下らないやり取り。

オレは魔刀ギルムを鞘に収めた。

薄暗い夜を強調するような月。

ここ尾久市は霊脈に優れた土地で、世界各国を詮索してもこの上を

行くのは手の指の数もない程だ。

その霊脈に惹かれて、先ほどのような魔物などが此処にたどり着き、街を徘徊するのだ。その様な異形の者共の相手は一般人などには手に負えるものではない。

故に魔術協会と言う組織は、管理者として古くからのエリート魔術士の家系を、この土地を治めさせている。

その魔術家の姓が坂魅であり、その次期当主が俺の隣の隣の隣で豪剣を背負い慥然とした表情で歩いている、坂魅驚真だ。

認めたくはないのだがオレの相棒で、最強に近い魔剣士で無駄なまでの美貌の持ち主だが、その性格と女癖の悪さは人類全てが交流不可能なまでに捻じ曲がっている。

オレは仕事帰りのサラリーマン以上に深く大きいため息をを吐きながら、腰にぶら下がった鞘に目を落とす。

鞘には魔刀ギルムが収納されている。

魔鋼大業物刀。通称<魔刀ギルム>。

白々と月に反射する日本刀のような刀身は、まるで活きているかのような存在感がある。

通常、人間なら誰でも魔力を持っている。魔力と言っても、それはいわば生命力のようなものなのだ。

一般人と魔術師の違いは、その魔力を通す道である魔術回路があるかどうかなのだ。それが、生まれながらにあるか、ないかによって素質が決まる。

しかし、魔術回路があっても出口が無いため、結局のところそれを外に放出し干渉させることは出来ない。

だが、不可能でもない。

宝具と言われる物がそれを可能にする。

魔刀ギルムもその一つだ。

魔術師はそれらに自らの魔術回路を結合、同化させ、自分の代わりにそれを出口にして、術として初めて発動させる事が出来る。

宝具は、剣、槍、弓、銃、宝石と様々にあり、自らの体を宝具と一

体化した奴もいた。宝具は基本的に魔術師の家系に一つか二つぐらいしかない。それを次の当主である肉親に譲り渡す。

この刀も長年使ってきたせいか、魔術発動のさいのシンクロが最近うまくいかない。

オレはその刀身を覗き込むように見る。

刀身に少し疲労が目立つ自分の顔が映る。友人に、この顔と俺の言動が似合わないと言われたが、別に気にする程でもない。

我知らず腹を押さえていた。胃が鈍い疼痛を訴えだす。

「胃痛か、下法使い」

「腹が空いただけだよ、心配でもしてくれたのか？」

驚真が呟く。腹を擦っている所を見られたらしい。

「貴様の首の切断手術なら、俺がどのような状況でも喜んで行つてやろう」

「その前に、お前の脳手術の予約を入れとけよ。異常だらけで手遅れかもしれないけどな」

冷めた鉄の囁き合い。

これも日常茶飯事。こいつと馴れ合うことができる人類はいない。何故ならこいつは猿人以下だからだ。

「さつて、腐れ仕事も終わったし、明日は学校もねえ。久々にゆっくりできるな」

驚真の返事はないが続ける。

「オレは彩と恵理香たちと一緒に映画を見に行くが」

「動画なんかに興味は無い」

「別に誘ってねえよ」

驚真が黙りこくる。オレに優勢。

「それで、お前は明日何するんだ？」

「人間生活」

分かつてはいたが、こんな性根が腐った奴と会話が成り立つ奴なんて、この世には絶対存在しないね。もちろん異世界とかにも。

オレはあることに気づいて周りを警戒した。

唐突に驚真は背に抱えた魔豪剣エルドスを静かに、優雅に抜刀する。

「捺揮」

「分かつてる」

魔剣士なんか言われる前から、オレはその気配を感じ取っていた。
火石竜子^{サラマンダー}を灰にした公園を出た辺りごろから、オレ達はつけられていた。いや、正確にはつけさしていたのだが、此処に来てそいつが行動に移したらしい。

オレは柄に手を搔けようとするが、膨大な殺気を感じ取り、半ば反射的に右側に飛び転がる。そのコンマ数秒後に俺の立っていた位置に疾風の刃が音速以上の速さで駆け抜けていった。その後にくく激しい金属音。驚真が魔豪剣エルドスで何かを弾き、返す刃で敵を切斬しようとする。

驚真と対峙していたのは人の形をしていた。だが、物理現象にまで及ぼす膨大な殺気は、到底人には及びもつかない程だった。

「ちっ」

驚真が瞬時に後退し相手との距離をとった。オレはその事実に愕然とした。人類の大半が嫌悪するような性格の持ち主の驚真だが、その実力は本物で、奴に接近戦だけで有利に立つ奴がいるなど思っても見なかった。

だが驚いている暇は無い。オレは魔刀ギルムを抜刀し、地を蹴り疾駆する。

同時に驚真も相手との間合いを詰め、驚真と左右からの斬撃を同時に叩き込む。

奴は棒立ちにつつまれたまま右腕でオレの刀を、左腕で驚真の剣をそれぞれ受け止めた。

驚真の超高速、超重量で飛来する剣が奴の左腕を半ばまで切り裂く。逆に言うとなんかそれだけしか斬れなかった。驚真はオレみたいな魔術師ではなく、主に接近戦を主体とした戦闘スタイルを持つ魔剣士なのだ。

魔剣士は魔術師のように、魔術を構成して世界に干渉することを主

としていない。魔剣士は魔力を外に放出するのではなく、内に魔力を通し身体能力を向上させるのが普通だ。しかし、人の体ではその負担が大きく、その様な理由で魔剣士は魔術師より少ない。だが、驚真はそれには当てはまらない。幼稚子から魔剣士としての訓練で頑丈に鍛えあがった体は、人の域を超えてしまっている。加えて驚真は、魔力を凝縮、瞬間的に放出することによって、動きの一つ一つを加速させている。魔力の消費が激しいそれは、魔力量が通常より遙かに凌駕している驚真だからこそできるのだ。その驚真にかかれれば、鋼できている丸太も切断することができるだろう。

その驚真の剣を片腕を半ば斬らせただけで止めたのだ。無論、オレの刀など奴の肉を斬れる訳無く、皮膚を傷つけることもできなかった。

だがこれで終わりではない。オレは密かに詠唱していた魔術を発動。術名、重嵐^{オウ・フル}押岩。凝縮させた大気を爆発的に開放させる事によって、重質量をもった空気の塊が奴の体を軽々と、いや、重々しく後退させる。

驚真は追い討ちをかけるように疾駆し、ギロチンのごとく奴に魔豪剣を振り下ろす。奴は両腕でそれを受け止めるが、今度の魔豪剣はそれを斬断させ、奴の左肩に叩き落す。

驚真は操術の一つである超周波鋼煉^{ウィフロ・アーチ}を発動させ、魔豪剣エルドスの刃を一秒間に6千にも及ぶ超高速振動させることによって、その斬断力を倍化させやがったのだ。

そこでオレは違和感に気づいた。奴の体から血が出ない。続く刃で、驚真は奴の首を切り飛ばそうとするが、奴は常識を逸脱した速度で後退した。その瞬間にオレは爆砲利空^{アール・バケル}・滅を奴の顔面に発動させる。風と炎の魔術を合わせた、基本的な爆発魔術だ。その程度では奴に致命傷は与えられないが、動きを一瞬止めるだけで十分だった。

その一瞬で驚真は距離を詰め、魔豪剣エルドスで今度こそ奴の首を刎ねた。

奴の頭がゴトリ、と地面に落ち、段々と灰化していった。

気がつけば胴体も跡形も無かった。

「結局なんだったんだ？」

それを見下ろしながら相棒に疑問を投げかける。

「さあな、だが明らかに人ではないな」

「そりやそうだ。ただの人間があんな動きをするはずないし、血が出ないのもおかしい」

それ以前に、驚真の剣を止めるほどの体の造りをしている人間がいたらとんでもない。

「そういえばお前、さっきの奴相手に後退してたみたいけど、足でも滑ったか？」

この程度の敵に驚真が遅れをとると思えない。オレは皮肉に言うように疑問を投げかける。

「馬鹿な寝言は永眠してから言うんだな。これを見ってみろ」

驚真は魔豪剣エルドスでそこを指す。俺は目を凝らしてみてみた。そこにはアスファルトが半径2メートルぐらいにかけて沈没していた。

「先ほどの敵が使ったのは高位魔術の一つだ。おそらくは重力操作の類であろうな、あと少し後退が遅れていれば、さすがの俺でも腕の一本はもっていかれた」

淡々と驚真は続ける。

「奴はそれ程の高位の術を使ったにもかかわらず、魔術詠唱どころか宝具らしきものも身に着けていなかった。これらから推測されるのは一つだ」

「………魔人か」

オレはきつと嫌な顔をしていただろう。

魔人、………世界のどこには五箇所だけ、魔界とやらに通じるゲートと言うものがあるらしい。宝具の大半は人が作った人工物ではなく、そこから流れ出てきたものらしい。そして、そのゲートを監視し、封印をを維持する組織が神教会と言われている。

る。昔、魔術協会の一部が更なる魔術向上を理由に、ゲートの封印を解こうとして、新教会と戦争になった過去がある。そんな事があったことで、現在進行形で魔術協会と新教会は断崖絶壁の壁のごとく壊滅的に仲が悪い。魔術協会に所属していないオレには関係の無い話だ。話を最初に戻すが。一時期だけゲートの封印が解かれ魔界とこちらの世界が繋がってしまったことがあったらしい。その時にあちらからこちらの世界に来たのが、憑依性の強い実体を持たない悪魔だ。そいつ等は人にとり憑き自我を奪う。そうして生まれるのが特殊能力を持った人間だ。奴らのことを魔人と呼ぶ。先ほどの戦闘で驚魔の剣を受け止めることができたのは、その能力によって質量密度を上昇させ、肉体強化を行ったからだろう。

俺達は会話を続けながら歩き出す。

「それにしても何で魔人がこんなところに出てくるんだ？」

「情報の少ない事を議論しても始まらない。明日、穠宗とむねに情報提供を要求したらどうだ。もしかしたら何か知っているかもしれんぞ」

「げ、あのエセ神父にか？」

俺は奴の顔を思い出して、思いつき顔をしかめる。

「思い出したが、穠宗がまたお前に服を送ってきたぞ。どうして俺宛に届くのか不思議と不快で堪らない。さつさとあの服を着て穠宗の前に姿を現して奴を満足させてやれ」

「あんなフリフリの付いている服はオレの好みじゃねえ。絶対、着んつ！」

それ以前にあの服を着ると何か裏がありそうで恐い。

「そういえばオレも思い出したが、女遊びは程々にしろ。お前が捨てた女がキーキー言いながらオレに詰め寄ってくるのはいい加減、堪忍袋の尾が真つ二つに引きちぎれそうなんだよ」

「なんだ、自分に男ができないから俺に八つ当たりしているのか？
そういえばお前は校内新聞で「彼女にしたいくないアイドルナンバー1」に選ばれていたではないか。おめでとう」

ブチッとオレの頭の中で何かが切れる音がした。

「てめえ言いやがったなっ！！普段はクールを気取ってるけど、実は中学二年生まで母親と風呂入ってたくせにっ！！」

「き、貴様どこでそれを！！貴様こそ昔飼っていた金魚に初恋の男の名前をつけて、毎日毎日、金魚に向かってその名前を呼んでいたそうではないかっ！！」

「なっ、何でお前がその事を知ってたんだよ！このマザコンっ」

「おへいおたな黙れ男女。珍獣であるお前の鳴き声は俺の耳が痛くなる要因だ。さっさと消えることを切に祈っている」

「オレの半径50メートル範囲にいる魔剣士に伝えといてくれ。お前が呼吸する度に地球温暖化が倍の速度で進行するから、人類全てのために超音速で死んでくださいとね」

沈黙。俺達はお互いを睨みつけたまま無言。

先に均衡を破ったのは驚真の方だった。

「やはり、貴様の性格は根元からボロボロだな」

「性根が溶けて、跡かたも無くなっているお前が言うな」

俺達は罵倒を言い合いながら歩いていると、十字路にたどり着いた。此処はオレと驚真の分かれ道でもあった。

こいつと一緒にいると秒単位でストレスが溜まっていくオレにとっては、此処からは安息の道になるわけだ。

「じゃあな。さっさと帰ってママの膝枕で寝かしてもらえ」

「貴様の方こそ。明日、調子に乗って化粧なんてするな。どうせ化け物になるだけだからな」

別れ際まで厭味いやみの押収をする俺達は、ある意味特別な関係だろう。少々キモイ響きだが。

「俺は貴様が嫌いだ」

「素晴らしく気が合うな。オレもお前が大嫌いだ」

厭味には厭味を返すのがオレのモットー。っ！か嫌い以前に死んでくれねーかなー。マジで。

「ふん。ではな、星と剣せいけんの祝福を」

驚真はどっかの種族の別れの言葉を投げ捨てて、オレの返事など待

たずに踵を返してそのまま歩き出す。

オレは嘆息し、長く重い空気を吐いた。

そのうち、どうせまた奴と組んで魔物や魔人との壮絶な殺し合いをすることになるだろう。

休暇の日ぐらいは、せめてそのことを忘れて、楽しい一時を過ごそう。

オレは夜の風を受けながら、まっすぐに家に帰った。

そこは火の海だった。自分の家だけではなく、その隣の家もその隣もその隣も、延々に続く炎々だった。オレはその地獄の中をただ歩いているだけだった。目に映る死体など無視して、耳に響く助けを呼ぶ声など聞こえないフリをして、何も考えずに歩いていただけだった。周りから迫りくる炎と、それに襲われた人だったモノを見て自分も此処で死ぬのだと、客観的に考えていた。どれだけ歩いても周りは赤一色だった。我知らずに脚が止まり、オレは膝から体を崩していった。オレは仰向けに倒れ、灰色に染まっている空を見上げていた。ポツリ、と一滴のしずくが目の下の頬に落ちてきた。それを合図とするように、ザーザーと一斉に大粒の雨が降り出す。後一時間。いや、三十分雨が降るのが早ければ、いったいどれ位の人たちが助かっていたのだろう。そんなことは分からない。雨は今になって降り出してきたのだから。オレの意識が朦朧としたしてきた。体力の限界はとっくの昔に過ぎていたのだ。風前の灯だった。もう

死ぬんだなと諦めかけた時だった。ピチャピチャ、と雨に濡れた地面を踏みしめる音が聞こえる。オレは重い瞼を必死に開けて見た。オレの真上で、青年のような男性がオレを見下ろしていた。その顔はまるで、オレが生きていたことを喜んでいようだった。男は雨に濡れていたからはつきりとは言えないが、オレにはその男が泣いているように見えた。そこで、オレの意識が暗転した。

いきなりだが、オレは男が大嫌いだ。絶滅しろってくらいの嫌悪感がある。そんな考えを持ってしまいう99・8パーセントの要因は、驚真やエセ神父の存在のせいだろう。

男共全員が奴らと同じ種類に分けられると思うと、思わず誰でもいいから男をぶん殴りたい衝動に駆られる。

男全般は嫌いだ、それでも一応は好みというか理想がある。包容力と言うものがある男がいいのだ。

今時の男にそんなものを求めるのもどうかと思うが、親父がそうだったから憧れているのかもしれない。

まあ、理想云々の前にオレはこの言動のせいで、はつきり言っ持てない。というか恐れられている。というか、なんか引かれてる。という訳で、学校内ではもうオレに軽々しく声をかけてくる奴は皆無になった。

だがしかし、こうして女服を着て街に出ると必ず声をかけてくる奴らがいる。

その内の十中八九は、そんな暇があるんなら勉強しろよって思わず

言いたくなりそうな、いかにも頭が悪いだろうと思うチャラチャラとしたナンパ男だ。

「ねえ、君一人？」

残りの0.2パーセントはそいつ等のせいだろう。オレは人を見かけで判断する奴が嫌いだからだ。

「もし暇だったら僕とお茶しない？君可愛いし」

だからオレは完全無視を決め込んでいる。いちいち返答なんてするのも面倒だ。

「もしもし。聞いてる？」

大抵の男はちよつと無視したら、あつさり諦めるのだが。こいつは自分に自信があるのか、かなりしつこい。

「あのさ、君の事なんだけど、もしかして無視」

しかし、いくら無視していてもオレにも限界というか、堪忍袋の尾と言う物がある。しかも、日々驚真やエセ神父のおかげで物凄く切れやすくなっているため、今現在でのオレの許容範囲はかなり狭いのだ。

「おいつ、無視かって聞いてんだよっ！！」

で、いきなりそいつがオレの肩を掴んできた。限界と言う名のリミットをオーバーしました。ていうか、我慢の限界じゃボケーっ！！

大体。「無視ですか？」って聞かれて「はい。無視です」なんて答えるのは、修学旅行の就寝時間とかで先生に「もう寝ましたか？」って聞かれて、律儀にも「はい。寝ました」と答えて寝ていないことがばれてしまって、廊下に正座させられるのと全くの同義なんだよっ！。

オレは今と昔の怒りを視線に乗せてそいつを睨みつける。

「うつ・・・・・・！」

オレの怒気を感じ取ったのか、オレにナンパしてきたチャラ男は戦慄し、後ずさる。

「今オレは物凄く腹が立っている。分かるな？お前の存在を抹消さ

れたくなかったら3秒以内に消えろ。むしろ死ね、不愉快だっ」

そいつはようやく、なにを言われているのが分かったのか、超情けない鼠の様に人混みの中に消えていった。

たく、くだらねえ。オレはチャラ男も嫌いだし情けない男も嫌いだ。やっぱ男共は絶滅してしまえ。

「捺揮ちゃん！」

オレが男殲滅計画を思案していると、聞きなれた友人の声が真後ろから聞こえてきた。

オレはゆつくりと振り返り、一瞥する。

「遅いつ！ いったい何時だと思ってるんだ」

「ちゃんと時間通りじゃん。捺揮が早すぎるんだよ」

オレに言ってきたのは、校内新聞で「彼女にしたいアイドルナンバー3」に輝いていた、三津浦彩だ。みつうらあや身長はオレより少し高いくらいのロングヘヤーの美女だ。出るところは出て、締まるところは締まっている完璧なプロポーションは美女と言うに相応しい。

「捺揮ちゃん。何時に此处来たの？」

と、オレの聞いてきたのは、同じく校内新聞で

「妹になって欲しいアイドルナンバー1」に選ばれていた月島恵理つきしまえり香だ。りかシヨートが似合う美少年のような小柄な少女は、持ち前の可愛らしい笑顔で妹属性の男を常日頃から誘惑している強者だ。

「約二十分前」

「知ってる」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「実はさ、私たち捺揮が来る前に到着してて、影から捺揮の様子を見てたんだ」

「捺揮ちゃんが、どれくらいナンパされるか賭けてたんだよねー」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「恵理香それ言っちゃ駄目だって」

「結果から言うと、何と十五分間で六回だよ。新記録だね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・お前ら。オレをだしにして賭け事してたのか

「？」

「「うん」」

「奢れ」

そんなやり取りを続けた後、オレ達は目的地に向かい、歩き出した。空はきれいな青色をしていた。

一瞬の一時だけでも、オレは彼女達のもよんで激務を忘れることができる。

そういえば、オレの自己紹介をしておこう。

オレの名前は柊^{ひいらぎなつき}捺揮^{なつき}。

身長164センチメートル、体重はノーコメント。髪は肩に垂れる位の長さだ。

この言葉遣いでよく誤解されるが、一応女だ。

十一年前、親父に死にかけだったオレは助けられ、養子になってから柊の姓を貰った。

親父は魔術師であり、その事実を知ったオレは親父に魔術を教えてくれと強請った。

はじめは渋っていた親父だったが、オレに素質が在ったことと、持ち前の諦めの悪さで何とか基礎知識だけは教えてもらった。

それから親父は五年後に死んでしまったが、オレは独学で魔術の構成式を学んだ。

鷺真と出会ったのは四年前ぐらいだったかな。親父はフリーの魔術師で魔術協会にすら所属していなかったが、尾久市を管理している坂魅家とは昔からの交流があったそうだ。親父が死んでしまい、孤立した魔術師となってしまったオレに、坂魅の現当主が協力関係を結ばないかと言ってきた。内容はシンプルだった。オレに次期当主と最近多くなってきた魔物などの異形のものどもの始末をしてくれと言ったものだった。正直に言うとはじめは喜んだね。自分が今まで培ってきた魔術が有効に使役できるからだ。しかし、実際は最悪だった。その最悪の原因は鷺真って名前の、道徳的に無駄だらけの脳みそに穴が開いた腐れ魔剣士だった。

さて、奴のことを思い出したら無性に腹が立ってきた。ここら辺で思考を中断しよう。

「捺揮ちゃん。早くー」

「遅いよ。捺揮」

おや、いつの間にか遅れていたみたいだ。

オレは地を蹴り、脚で地面をかみ締め走り出した。

剣と術が交じる時2

今オレは天国に居るね。

口いっぱいのに広がるとろける様な甘味が、オレの味覚を刺激する。ふわりとした食感がなんとも堪らない。

これを幸せと言わず何という。甘党万歳。

「そうしてると、捺揮ちゃんって女の子だなっ、て思うよ」

恵理香がオレの顔をまじまじと見ながら言う。

オレは口の中のブルーベリータルトを飲み込んで、口を開く。

「今更なに言ってたんだ。オレは元々女だ」

頬が緩んでいたらしい。

「確かにそうだけど、捺揮のその言葉遣いが駄目なんだって」
彩が指摘する。そんなことオレだって分かってるよ。

「仕方ないだろ。通ってた学校は小も中もほぼ男子校みたいなもんだったんだから。自然にこんな口調になってたんだよ」

近所には年頃の同姓も居なかったので、学校だけが唯一の交流の場だった。そのせいか、高校に入るまでは女友達なんて一人もいなかったし、親父もオレの口調に関しては何も言わなかったので、別に気にしてはいなかったのだ。

まあ、今も気になんてしてないが。

「気にしたほうが良いと私は思うよ。素材は良いんだから、それさえ直せば男なんてより取り見取りなのに」

「オレは男が嫌いだから別に良いんだよ」

大体ちよつと口調を変えたぐらいで、寄ってくる男なんてどうせ大したモンじゃないだろう。

「でも捺揮ちゃんは頭も良いし、運動能力も抜群だし、美人だから結構持ててるんだよ」

「嘘付け。校内でオレに話しかけてくる男なんて皆無に等しいぞ」

「だって捺揮ちゃん、」近寄ってくるなオーラ」みたいな物だして

るんだもん」

だつてうぜえだろ。男なんて。

とか思っている、恵理香は満面の笑みを浮かべた。

「と言う訳で、今日のピリ辛風味、恵理香ちゃんのレディへの道会話レッスンを受ける？」

「どう言う訳だ。いらん」

「またまた、遠慮しないで」

「口の動きを良く見る、い、ら、ん」

オレの明確な拒絶を、恵理香は笑って右から左に受け流す。

「捺揮。先のために受けておいたら？将来的にその口調でやっていける保証は無いんだからさ」

「それに私たちのクラスって、たしか文化祭でコスプレ喫茶やるでしょ。もちろん捺揮ちゃんも出すつもりだからその練習って事で」
彩と恵理香がオレを説得しようとする。

「・・・・・・とか言いつつオレで遊びたいだけだろ」

「まさか」

彩が演技が掛かったように頭を横に振る。

「ただ捺揮の事を思ってたよ」

はいはいそうですか。やりや良いんでしょ、やりや。

オレが降参のジェスチャーをすると、恵理香はさらに満足したようだ。

「じゃあまずは、オレではなく私と言ってみましょう」

「たわし？」

いかんいかん。思わず拒絶反応が出てしまった。

「たわしじゃなくて、わ、た、し。これから先はわたしが主語で会話ね」

「わ、た、し。これで良いのか？」

「結構結構。じゃあ次は・・・・・・」

ザワザワと人が入り混じり、耳が痛いほどに騒がしい空港で一人の青年が、微笑を浮かべたまま好奇心を出しながら歩いていた。

「きよ……エイド殿。先に行かれては困ります」

慌しい中で、青年の背中を必死に追いかけるプラチナブランドの女性がいた。

「おやおや、すみません。日本には始めて来たので、少し浮かれていました」

青年は振り返り慌てる彼女を見て、まだ微笑を浮かべて答える。

「エイド殿。少しは慎重に行動なさってください。何があるか解りませんので」

「日本は比較的平和な国と聞いていますが？」

彼女は額に小さいしわを寄せる。

「万が一という事もあります。御身に何かあると一大事です」

青年はやれやれという風に肩をすくめる。

「そんな風に肩を硬くしたら何処に行っても楽しめないよ」

青年は琥珀色の瞳を細くしながら続ける。

「それに、今の僕は執行人だよ。君は隠密行動と情報戦には向いていると思うけど、こういう場には不向きだね」

青年は女性を叱咤している様だったが、その口調は彼が気分を害している感じではなかった。

「も、申し訳ございません」

それでも彼女は必死に頭を下げていた。その様子を見て、青年は彼

女に聞こえないように小さなため息をついた。

（やっぱりギリ君にしたほうが良かったのかな？）

青年は二十代後半の男性の姿を思い浮かべる。でも彼も何処となく硬く苦しいので、やはり彼女を選んだのは最適だったといえよう。

「そういえばフィネス君。君の商売道具はどうしたのかな？」

彼女がいつも隠して携帯しているそれを、現在は所持していなかった。たので疑問を投げかける。

「それでしたら一般の航空機では持ち込めないので、密輸してその地域の神父に預けています」

そうか、と青年は頷いた。

そのまま彼らは歩き出し、無数の人が入れ替わり続けるそこを後にする。

**

今のオレはオレであってオレじゃなくて、今喋ってるのはオレの偽者とかで、本物のオレはきつとスリランカとかで本物の夕日などを見ているはずだ。

オレの目の前には頬を引きつつて笑いに絶えている二人が居る。

そこにオレは爆弾を投げかける。

「どうして二人とも笑ってるにや。私、何か可笑しい事言ってるかにや？」

それが決め手となつたのか、二人は堰を切つたように笑う。嗤う。晒う。

もう我慢の限界。

「ていうかにや、どう考えても方向性が違ってんじやにやいかー
ーっ!!」

オレは二人の柔らかい頬を摘み上げ捻り潰す。

「ひたいひたいよ、なふひひゃーん」

「あたたたごめんごめんて、捺揮がすっかり騙されちゃったから、
つい面白くて」

まだ嗤つてやがる。このまま頬を引き千切つたらか。

「お前らを信じたオレが馬鹿だったよ」

いまだに頬を引きつらせて嗤うことを我慢している二人に、不機嫌
にオレは言つてやる。

「でもさっきの捺揮ちゃん、すごく可愛かったよ」

「うんうん。思わず抱き着きたくなっちゃう程だったね」

「てめえら笑つてただけじゃないか」

オレはそっぽ向き、ガラス張りの窓の向こうに視線を向ける。ちょ
うど、パトカーの高速で複数台に渡つて、通り過ぎていくところだ
った。

何か大きな事件でも起きたのだろうか。

「最近多いよね」

ポツリと、彩が独り言のように呟いた。オレは彩に視線を戻す。

「多いって、最近なんか事件でも多発してんのか？」

「捺揮ちゃん知らないの？最近、通り魔とか一家虐殺事件とかが隣
町で多発してるみたいなの」

淡々と、まるでその事件と関っているような口調で恵理香が続ける。
「しかもその殺人に使った凶器は、鈍器の様な物での撲殺つて事にな
ってるけど、検査結果だとまるで人が素手で殴つたような形をし
ていたらしいの。通り魔事件のほうも、みんな頭を何かの力で潰さ
れてるみたいなんだって」

一般的と常識的に考えて、人が素手で一家惨殺なんて到底不可能だろう。いや、驚真なら出来そうな気もするが、アレはもう人間じゃないので無視して構わないだろう。それと、通り魔の方。昨日現れた魔人。それらが隣町のほうで無差別に人を襲っているというのなら合点がいく。だがそれでは、オレが今までその事件を知らなかった事はどう説明できるだろう。もし魔人による事件が多発しているというのなら、エセ神父の方から何かの要請があるはずだ。あいつが今までそれを放置していると言うのであれば納得がいかない。アレはアレでアレだけど一応は神父で仕事をこなしている様な気がするのだ。ただの勘だが。

オレが思考を巡らしていると、彩が「次は何処に行く？」と話題を変えてきた。

憶測だけの考えなど纏る筈も無く、オレはその流れに乗ることにした。

「服とか見ていこうよ。特に捺揮ちゃんは今うちよつと色気が出るような服を着なくちゃ」

すっかり切り替わった恵理香は、オレに服を勧めてくる。正直に言う、そういう物にも興味がないと言えば嘘になるが、それによって動きが制限されるのは気に入らん。

すると唐突に、オレの鞆から異様なサイレンのような着信音が響く。オレはそれを、何も聞こえないフリをして無視する。

「捺揮。何か鳴ってるっぽいんだけど？」

「無視しろ。それに出ると、オレは今から地獄の住人が起こした災厄に一々出向かわなくてはならなくなる予感が猛烈にする」

しかし、携帯電話は一向に鳴り止まないの、オレは最大限の嫌悪を持って電話の電源を切った。

これでオレの平和は間違い無し。あー幸せだこんな日がいままでも続けばいいのに。

ケーキも食べ終わったので、オレ達は席を立つことにした。すると今度は彩の方から、携帯電話の着信音が鳴り出した。

彩が「いったい誰だろ？」と怪訝な顔をして、電話に出た。俺は腹部と胸部が緊張するほどに嫌な予感を覚えた。

無言が続く、彩がチラチラと俺に視線を送る。そして、物凄く意味不可解な顔をしてオレに電話を差し出してきた。

「いったい何処のアホからだ？」

オレは携帯電話を受け取りながら、彩に問いたです。

彩は無言で哀れむような視線を俺に向けてきた。

オレは携帯電話の先を耳に近づける。

「誰だ？」

「貴様こそ、誰がアホだと？」

物理世界一のアホからの声だった。

**

揺れるたびに背中に当たる魔刀ギルムは竹刀袋に入れて背に抱え、運動靴から履き替えた、周りには識別できないようなデザインの戦闘靴で、地面を苛々しく蹴りつける。

ある程度の距離を歩くと、隣町とを繋ぐ大橋の前でそいつは悠然と立っていた。

生ける彫像のような腹立だしい程の美形の横に、二人の女が寄り添うように立っていた。

一人は二十代前半ぐらいの眼鏡をかけたすらりとしたスタイルの美女だ。もう一方は、少し痩せ気味の自分と同年代ぐらいの美少女だった。どちらもオレの知らない人間だった。

そして二人ともが、鷺真の横顔に魂を奪われたかのように陶然と見惚れ、鷺真の声にいちいち頷いていた。

鷺真の近くに女たちが群れているのはいつもの事だ。

「今から仕事だ。お前達は何処かに行つてろ」

女達はオレから見ても哀れなくらいに、脱兎のごとく先を争うように去つていった。まるで暴君の忠犬だな。

「お前いったいどれだけ女がいるんだ？」

俺は彼女たちが去つた方角を見ながら疑問を投げかける。

「さあな、女の方から勝手に寄ってくるので、途中で数えるのを止めた」

「お前、ホントに女の敵だな。いつか刺される」

俺の言葉に鷺真は鼻で笑う。

「その時は、別の女が身を挺して守ってくれるだろうな」

全世界の女代表として、オレは想像の中で鷺真を刺しておく。もちろん、かなり遠くから。

「無駄話はこちらまでだ。早く行くぞ」

鷺真は身を翻し、橋の向こうに歩き出す。

オレは苛々しく後を追う。

「穉宗からの召集だったのだが、貴様が一向に電話に出ないので、仕方が無いので貴様の知人に掛けて見たところ見事当りだったのだ。なぜ怒っている？」

「天国のお花畑で遊んでいるが如く、幸せ満喫中だったにも拘らず、いきなり地獄に落とされ閻魔のような奴に会い、果てには働けと言われて不機嫌にならない奴がいるのか」

オレは鷺真を睨みつけたまま言う。

「そして一番の問題は、なぜ、お前が、彩の電話番号を知ってるんだよ」

鷺真はその内面に綺麗に反比例しているような、無駄なまでの神々しいほどの美形である。

彩はオレの大切な友人だ。まさかとは思うが、彩がこいつの毒牙に

掛かっているのなら、・・・・・・殺す。

いや、正面からは無理っぽいので、夜道に背後から超高位大魔術で正義と道徳がたくさん詰まった、オレの裁きの鉄槌という名の暗殺を執行する。

「少し調べてみたいことがあったのでな、校内の図書室を行ったところ貴様の知人がいたのだな。それだけだ」

「いや、何でそこから番号を聞くまでに発展するんだよ」

「女性に番号を聞かないのは礼儀として普通であろうが」

「お前の礼儀は普通の一般人が考えている礼儀と、大きくかけ離れていることに、いい加減気づけ」

今度彩に会ったら、携帯の番号を変えるように説得しよう。いやマジで。

「お前、それほどまでに女癖が悪かったら何時か母親がストレスで病死するぞ。昔は無邪気でいい子だったのに」とか言つてさ」

驚真は返事を返さない。どうやら思い当たる節があるようだ。ざまあ見る、けけけ。

「お前が母親に見捨てられるのは時間の問題だな」

「そんなことは無い。母上は俺を愛している」

「お前、二言目には母上だな。そういやおまえ、前に女嫌いだつて言つてたけど、自分の中での女は母だけだつて意味か？」

驚真が黙りこくる。げげ、もしかするともしかしなくても凶星っ！！

「あのー驚真さん、ここ日本では近親相姦と言う素晴らしい四字熟語があるのですが」

「冗談だ。俺は母上に真実の愛を捧げているだけだ。それに、これでも許婚がいる」

そうか、と冗談かと残念がるより、驚真の許婚がいると言う言葉に、しばし理解が遅れた。

こんな人間的に破滅した、社会に不要どころか害を与える糞以下人間の妻になるなんて、きつと宇宙的に広い器の持ち主なのだろう。一回で良いから顔を拝んでみたい。

「ついでに言うと、そいつは俺と許婚と言う関係であることを知らない」

あゝ終わったねその女の人生。驚真の妻となったあかつきには、驚真の言動や行動を理解できずに「あの人はいつたい何なのだ？」と悩んだ挙句、ストレスが蔓延し、白髪や皺などが増え続け、果てには精神科の病院に通院または入院する末路が、オレには見えてきた。

「許婚って美人なのか。ていうかオレの知ってる奴？」

「性格はかなり難ありだが、美人といえば美人、なのか？」

「何で疑問系なんだよ。オレが知るか」

軽口と軽口を重ねながら、いつの間にか目的地にたどり着く。

隣町の丘の上に凄然と、周りには建物一つ無い場所でそれは建っていた。

オレと驚真にとって愉快的思い出など何一つ無い教会。

そこだけは今まで通っていた騒がしい雰囲気などは無く。静寂と不気味さを蔓延させていた。

オレはいつも此処に來ると吐き気を覚える。

驚真は何も感じないらしく。歩調を緩めることなく、床石を蹴り歩く。

オレは嫌々ながらも驚真に付いていく形で教会に向かって歩を進める。

ふと、何かの視線を感じて足を止め、周りを見渡した。小鳥のさえずりが聞こえるだけで別段変わった様子は何も無かった。

気のせいかな。

思い直して、オレは教会の中に入った。

教会の中に入ると、これまた異様な雰囲気漂っている。ただオレがそう思ってるだけなのだが。

前方の教壇の前に、鷺真と同じくらいの身長の中肉中背の眼鏡男が立っていた。

ここの教会の神父であり、かつ、自称親父のライバルと言っていたエセ神父である。

そいつが徐に言葉を紡ぎ出す。

「よく来た鷺真、それに捺揮。召集からかなり時間が経っているように思うが、今は不問にしよう」

落ち着いた感じで低い声を出す、齢三十代後半の男。穂宗。まるで時代劇とかに出てきそうな名前だなとつくづく思う。

こいつは新教会所属の神父でありながら、魔術協会にも籍を置いている曲者なのだ。オレには鷺真と並ぶただのアホにしか見えない。

「ところで捺揮。私が送った新しい服は気に入ってくれたかな？」

「あんな服を着たらオレはきっと発狂死する」

オレは亜高速で答えてやる。

オレの返事にエセ神父は自らの顎に手をやり、フム、と呟いて何かを考え込む。

そして教壇の下から何かを引っ張り出してきた。

「君がそう思うと思ってな、少し趣向を変えてみた。今までの私の趣味が半分入っていたからな、これなら君に似合うだろう」

とか言いながら、オレに引っ張り出した来た服を掲げる。

確かに今までのフリフリガ付いた、いわゆるゴシックローリータのような下手物ではなく、近代的かつ流行的な服といえよう。

オレはその服を受け取る。

「ほう、やはり君も気に入ってくれたか。それはなによ「びりりりりりrr」りだ？」

そして破く。それはもう徹底的に上から下まで真っ二つに。

ていうか。

「こんなもんをオレに着ると？てめえオレに羞恥死ねって言うてんのか？」

何が悲しくてへそを露出するような服を着なあかんだ。

「ははは、私の月収の五分の一が飛ぶほどのブランド品だったんだが」

「そんな金あったらユニセフ募金でもしてろ」

前々から思っていたが何でこんな奴が神父なんてやってんだ。おかしいだろどう考えても。

オレが世界の不条理とか考えていると、横から鷺真が不機嫌さを隠そうともせずに、どすが聞いた声を出す。

「茶番はそこまでにしろ貴様ら。穉宗、用が無いと言うのならオレは帰るぞ」

穉宗が鷺真に視線を移す。

「すまない。ではそろそろ本題に入ろう。最近この街で猟奇的殺人が続いてることは知っているな」

オレは頷く。知ったのは物凄くついさっきなのだが、前から知っていたように振舞うのは別に罰じゃないと思う。

鷺真の方は至極当然だ、と言いたげな顔をしている。なんか悔しい。

「頭の回転が速い君達なら薄々感ずいているとは思うが、それらの犯人は」

エセ神父が一問を空けて言う。

「魔人だ」

剣と術が交じる時2（後書き）

次話公開は1または2週間後になります。

初めて真面目に創った作品なので設定とか曖昧です。なので何か質問があれば、評価と共に送ってください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7262c/>

マジシャンズ・ブレイド

2010年10月9日00時22分発行